

(様式 8)

令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する
実践研究（高等学校）」委託業務報告書【推進地域】

番号	15	都道府県市名	新潟県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

(1) 学力に関する状況

推進地域の学校に入学する生徒の一般選抜学力検査の総合得点は、県の平均点よりも低く、義務教育段階の学習内容の定着が十分であるとは言えない状況にある。その分布の広がりも大きく、生徒の学力差も大きいと言える。

(2) 家庭学習に関する状況

学習時間調査では、家庭で学習をしない生徒の割合が、平成 27 年度で約 32%、平成 28 年度で約 34%、平成 29 年度で約 32%と家庭学習の習慣が定着していない生徒が多く、平成 29 年 9 月に推進校で実施した「生徒の実態に関する調査」では、「授業でわからないことが多い」と答えた生徒の割合が学年が上がるほど高くなり、生徒の 3 分の 1 を占めている状況である。

(3) 地域に根ざした取組の視点

在籍する生徒の 3 分の 1 以上の生徒が近隣の中学校出身であることから、推進地域における「学力定着」の実践研究モデル校として、地域に根ざした取組が可能であると考えられる。

2 研究課題（令和元年度の重点課題）

(1) 5 教科及び全校体制で取り組む授業改善

推進地域及び推進校の生徒の学力の現状を踏まえ、平成 30 年度は国語、数学、英語の 3 教科で、生徒の基礎学力の定着を図るため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めた。

平成 30 年度の本事業の取組における成果を発展させるとともに、新たに地理歴史・公民、理科も加えて、全校体制で授業改善を進め、生徒の基礎学力の定着を図り、生徒の希望する進路の実現につなげていく。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す工夫

教科個別の学習にとどまらず、これからの時代に必要となる資質・能力を身に付けることを念頭に、生きて働く基礎的な知識・技能の習得はもちろん、学ぶ意欲を高めながら、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成をめざす。さらに、個、集団で学ぶそれぞれの良さを生かし、推進校独自の「習得→活用→探究」の学びのサイクルを構築する。そのため、推進校の教員が、育成したい力や生徒像から逆算し、推進校での学びを通じて「何をどのように学び、何ができるようになるか」を共有するとともに、社会や世界との関わり方につながる学びとは何かについても研究する。合わせて、学力向上推進委員会の委員を中心に、推進校の生徒の実態に即した個人内評価の観点について検討する。

3 研究の内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

ア 校内に「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究委員会（学力向上推進委員会）」を設置した。構成は、教頭、教務主任、進路指導主事、国語科、数学科、英語科、地理歴史・公民科、理科の教員からなり、全校体制で事業に取り組んだ。

イ 地域の高等学校や中学校と連携を図り、県外の先進校（埼玉県立新座高等学校、富山県立小杉高等学校、埼玉県自由の森学園高等学校）を視察し、視察の成果を校内研修で共有した。

ウ 研究授業及び学力向上推進協議会を年2回実施し、地域の高等学校や中学校と指導方法を検討した。

エ 互見授業においては、推進校独自の授業参観シートを作成し、教員相互の参加と協議会を行った。同じ教科内だけでなく他の教科の教員が加わることにより、新たな知見が得られた。

(2) 推進校への具体的な支援策

研究課題に対して、指導主事が学校を訪問し、推進校の現状を把握しながら発展させることができるように、以下の点について指導、助言を行った。

ア 学習意欲の向上、基礎基本の定着に資する「主体的・対話的で深い学び」をテーマに、単元構成や指導方法だけでなく、見方や考え方を働かせるための問いかけの工夫等について、地域の小・中学校の取組も踏まえながら、県立教育センターの指導主事と連携して実践的な指導、助言を行った。

イ 研究指定校が位置する新潟地区の中学校及び高等学校の教員を対象に公開授業と学力向上推進協議会を開催し、授業改善や中高連携の在り方などについて指導、助言を行った。

4 研究の成果、作成した成果物

(1) 全校体制で取り組む授業改善

学力向上委員会を設置し、組織的に授業改善に取り組んでいる。対象教科を昨年度までの国語、数学、英語に加え、今年度は地理歴史・公民、理科に拡大している。校内研修を充実し、実践の成果の共有を図っている。「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、公開授業や協議会において発問や授業作りの方策等について指導主事が指導を行った。

(2) 近隣の学校との連携

公開授業と研究協議会を開催し、近隣の高等学校のみならず、中学校からも教諭の参加があった。授業参観後の研究協議会で授業改善の方策について活発な意見交換が行われた。

(3) 成果の周知

今年度開催した教務主任研修会において新津南高等学校の取組の実践発表を行い、組織的な授業改善の在り方について全県に周知を図った。

5 課題とその分析

(1) 全校体制で取り組む授業改善

本事業を通して、生徒の思考力、判断力、表現力の育成と学習内容の定着に向けた全校で取り組む授業改善の体制を構築することができた。教科内だけでなく、教科間の連携を図るとともに、研究授業及び協議会を通して他の中学校や高等学校の教諭と意見交換・情報共有を行い、今後求められる授業の在り方や効果的な指導方法について、教員が理解を深め、実践につなげることができた。この成果を生かし、今後は進路指導部、生徒指導部、教育相談支援委員会などとの連携を推進し、生徒理解を深めた上で、授業改善をさらに進める。生徒が学校生活の中で成功体験を積み重ねることで自尊感情を育み、学習への意欲を高めることで基礎学力の定着を図る。

(2) 生徒の変容

生徒を対象に授業に関するアンケートを行い、生徒が主体的・対話的に学ぶことができるようになっている。（詳細は【様式9】を参照）

ア 授業中に生徒間で相談し、考えを深める時間が設定されていることで、学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えたり、仲間の発言で自分の考えを深めたりしている。

イ 授業が、教科の理解や考え方の気づきにつながり、授業を受ける上でのより良い姿勢に繋がっている。

6 推進地域における研究成果等の今後の活用

推進校における取組を広く周知し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進するため、新津南高等学校の研究・実践の成果を研究集録としてまとめ、県内の県立高等学校及び県立中等教育学校に配付し、各学校における授業改善の推進を図る。

(様式 9)

令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する
実践研究（高等学校）」委託業務報告書【推進校（学校）】

都道府県市名	新潟県	学校名	県立新津南高等学校
--------	-----	-----	-----------

1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態

<生徒数・学級数(平成31年4月現在)>

学校名	新潟県立新津南高等学校 (にいがたけんりつにいつみなみこうとうがっこう)				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	4	4	5	13	30
生徒数	160	156	188	504	
学校のホームページアドレス		http://www.niitsumi-h.nein.ed.jp			

平成31年2月に1、2年生を対象に実施した「学校生活等に関する意識調査」では、「あなたは、現在の自分の高校生活全体についてどう感じているか」という質問に対し、「学校生活に満足していない」と答えた生徒の割合が、1年生で約20%、2年生で約28%にのぼり、そのうち、満足しない理由に「学校の授業がおもしろくなく、学習が充実していない」と答えた割合が、1年生が約20%、2年生が約13%であり、学習活動の充実が課題として浮かび上がってくる。2年生については、1年時の約32%から改善しているものの、生徒たちが学習内容を理解し、充実した学習活動を行うために継続的な授業改善の取組が必要であると考えられる。

また、同調査では「あなたの高校卒業後の進路希望の実現のために、現在の高校での学習内容は、直接役に立つと思うか」という質問に対し、「役に立たない」と答えた生徒の割合が1年生で約30%、2年生では約35%にのぼり、社会や世界との関わり方や学ぶことの意義を見い出せず、自分の興味・関心や適性を考えることもないまま、将来の進路を考える生徒も少なからずおり、そのため、授業に集中できない生徒も見受けられる。

2 研究課題（令和元年度の重点課題）

推進校の生徒の学力の現状を踏まえ、平成30年度は国語、数学、英語の3教科で、生徒の基礎学力の定着を図るため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めた。本事業2年目の取組では、平成30年度の本事業の取組における成果を発展させるとともに、新たに地理歴史・公民、理科も加えて、全校体制で授業改善を進め、生徒の基礎学力の定着を図り、生徒の希望する進路の実現につなげていく。

また、教科個別の学習にとどまらず、これからの時代に必要となる資質・能力を身に付けることを念頭に、生きて働く基礎的な知識・技能を習得はもちろん、学ぶ意欲を高めながら、未知の

状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成をめざす。さらに、個、集団で学ぶそれぞれのよさを生かし、推進校独自の「習得→活用→探究」の学びのサイクルを構築する。そのため、推進校の教員が、育成したい力や生徒像から逆算し、推進校での学びを通じて「何をどのように学び、何ができるようになるか」を共有するとともに、社会や世界との関わり方につながる学びとは何かについても研究する。合わせて、学力向上推進委員会の委員を中心に、推進校の生徒の実態に即した個人内評価の観点について検討する。

3 研究の具体的内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

- ア 校内に「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究委員会（学力向上推進委員会）」を設置した。構成は、教頭、教務主任、進路指導主事、国語科、数学科、英語科、地理歴史・公民科、理科の教員からなり、全校体制で事業に取り組んだ。
- イ 地域の高等学校や中学校と連携を図り、県外の先進校を視察した。
- ウ 学力向上推進協議会を年2回実施し、地域の高等学校や中学校と指導方法を検討した。協議会にあわせて、公開授業も実施した。
- エ 互見授業を実施した際には、校内で協議会を実施し、教科内の教員同士の協議はもちろん、教科を越えた教員同士でも授業の在り方について協議した。

(2) 推進地域（教育委員会等）との連携

国語、数学、英語、地理歴史・公民、理科の指導案作成の助言と、公開授業において継続的な訪問指導を受けた。

(3) 学力向上に向けた具体的な取組

- ア 主体的・対話的で深い学びに対応した教材の開発について
近隣の中学校と連携・協力を強化しながら、国語、数学、英語、地理歴史・公民、理科について、汎用性の高い、主体的・対話的で深い学びに対応した自主教材の開発を行い、授業実践し、授業改善を図った。
<中学校訪問（令和元年5月29日）>
授業見学 新潟市立新津第一中学校（国語）
 - ・総合学習と連携したプレゼンテーション・スキルを伸ばす授業を参観した。
 - ・ルーブリックに基づくパフォーマンス評価の方法と、生徒がその評価基準を用いて自己評価をしたり、他者を評価したりする様子を観察した。
<中学校訪問（令和元年6月10日）>
授業見学 新潟市立新津第一中学校（英語）
 - ・「資質・能力」を育てる「深い学び」のある授業とは具体的にどのようなものかを学ぶと共に、「班で協力して先生の紹介ができる」ことを目指した授業を参観した。
 - ・生徒の学ぶ意欲を高め、「協働作業」の土台となる、様々な工夫を知ることができた。
<中学校訪問（令和元年11月21日）>
授業見学 新潟市立新津第二中学校（国語・社会・数学・理科・英語）
 - ・本校に入学してくる生徒が、中学校在学中にどのように学んでいるのか、その実態を把握し、日頃の指導にどう生かすか検討した。
 - ・基礎・基本の定着のための具体的な学習活動と、一人一人の生徒に寄り添い、個々の習熟度に合わせた授業作りの方法を知り、職員と共有を図った。
- イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業展開について
各教科担当者間で、生徒の思考の活性化を図るための問いかけの内容や方法、場面づくりについて、研究を進め、授業で実践した。
各教科の授業において、「学習共同体」の構築をめざし、協働学習を取り入れることで、互いに自分の考えを自分の言葉で説明する機会を設けて表現力等を高めた。
また、学び合いを行うことで互いに質問しあう人間関係を構築して、協働して課題解決することができるような授業展開を行った。

ウ 生徒の進路意識の向上と生徒たちが身に付ける力について

協働的な学びを取り入れた授業改善、総合的な学習の時間や総合的な探究の時間の充実、自己肯定感や自己有用感を持たせ、自らの進路選択を促すきめ細かな進路指導、生徒指導を実践しながら研究した。

エ 校内研修

＜校内研修（平成31年4月26日）＞

講義「普段の授業でICTを活用するための手順について」

講師 数学科 小栗 武 教諭

- ・電子黒板について、動画や教科書データの扱い方など、基本的な操作方法を学んだ。
- ・電子黒板活用に向けた、教材作成の手順等について学んだ。

＜授業公開週間（令和元年7月16日～7月23日）＞

- ・教科の枠を超えて互いに授業見学を行うことで、授業改善の一助とした。
- ・職員がより抵抗感なく授業を見せ合えるよう、群馬県立吉井高等学校の取組を参考とし、「見に来てシート」「授業見学シート」等を活用し、円滑な実施につなげた。
- ・授業公開に伴う課題を整理し、改善点を模索するなかで、後述する、特別支援教育の観点による授業参観である、「授業研究会」の実施へとつなげた。

＜校内研修（令和元年8月6日）＞

講義「学級経営マインドをもった教科教育指導のすすめ」

講師 片桐史裕 准教授（上越教育大学教職大学院）

- ・子どもの成長を促す主体的・対話的で深い学びが起る授業デザインについて学んだ。
- ・集団づくりの重要性と、学級経営の視点から教科指導を行う必要性を知った。

＜校内研修（令和元年9月13日）＞

講義「特別支援教育の観点による授業研究について」

講師 国語科 藤枝 陽 教諭

- ・埼玉県立新座高等学校における「授業研究プロジェクト」について、研修報告を行った。
- ・上記プロジェクトを本校で実施する上での注意点等を全職員に周知した。

＜授業研究会（令和元年9月20日）＞

授業参観①化学基礎（1年2組）

授業参観②コミュニケーション英語Ⅱ（2年1組）

授業参観③古典B（3年4組）

- ・埼玉県立新座高等学校の実践に倣い、授業時の生徒の行動観察を主眼とした「授業研究会」を本校で実践した（各学年1クラスの授業参観を行った）。
- ・授業参観で気づいた生徒の特徴を担当者で情報交換し、今後の生徒指導や授業改善に必要な視点を得た。

オ 研究授業

＜第1回研究授業（令和元年9月26日）＞

指導者 新潟県教育庁高等学校教育課指導主事 山本 寛

新潟県立教育センター指導主事 松崎 大輔

新潟県立教育センター指導主事 永橋 知明

授業参観①英語表現（1年3組、4組）

授業参観②生物（3年2組）

授業参観③国語表現（3年文系）

授業参観④数学Ⅰ（1年1組）

- ・国語、数学、英語、理科の公開授業を行い、近隣の中学校・高等学校5校9名の参観者から授業の感想および助言をもらい意見交換を行った。

- ・公開授業に向けて、上記指導者より、国語、数学、英語の指導案作成の助言を受けた。また、当日の公開授業においても指導・助言を受けた。
- ・各公開授業においては、同月20日に行った「授業研究会」の形式に基づく指導案を作成し、今年度の本校における取組の1つとして紹介した。
- ・授業参観後は、分科会形式で協議会を行った。各公開授業についての質問・感想だけでなく、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業展開について意見交換を行った。

<第2回研究授業（令和2年1月22日）>

指導者	初等中等教育局視学官	濱野 清
	初等中等教育局教育課程課	阿部 靖史
	新潟県教育庁高等学校教育課指導主事	高見 由光
	新潟県教育庁高等学校教育課指導主事	山本 寛
	新潟県立教育センター指導主事	羽二生大輔
	新潟県立教育センター指導主事	吉田 桃子

授業参観①	1年3組、4組	英語表現
授業参観②	3年3組	古典B
授業参観③	1年2組	現代社会
授業参観④	1年1組	数学A

- ・国語、数学、英語、公民の公開授業を行った。近隣の中学校・高等学校7校10名の参観者から、第1回研究授業との比較等も含め、授業の感想および助言を得た。
- ・公開授業に向けて、新潟県教育委員会の上記指導者より、国語、公民、数学、英語の指導案作成の助言を受けた。また、当日の協議会において、教科毎に指導・助言を受けた。
- ・初等中等教育局視学官より、本校の本事業の各取組に対する感想や、地域の特徴を踏まえた教育課程、また、カリキュラムマネジメントおよび新学習指導要領の読み方などについて、指導を受けた。

カ 先進校視察

県外の先進校を視察し、本校における研究の参考とする。

- ①研究体制の整備
- ②授業に関する基礎資料（指導案等）の収集
- ③授業見学による技法の獲得

<埼玉県立新座高等学校（令和元年6月17日）>

- ・授業研究プロジェクトの実践内容について詳しい説明を受けた。本校職員も授業検討会にも参加し、同取組を本校で実施するための課題等を整理することができた。
- ・授業参観を通して、生徒とのコミュニケーションの取り方や、声かけについて、生徒との信頼関係を築く上での具体的な工夫を知ることができた。
- ・個別支援計画の作成やキャリアサポート（通級指導）について、先進的な取組を知ることができた。

<富山県立小杉高等学校（令和元年10月24日）>

- ・平成25年度から27年度まで本事業を推進し、成果を上げた小杉高校を視察し、事業終了後においても、いかに授業改善の取組を継続し得るかについて助言を得た。
- ・学期毎の公開授業研究会や全教員による「授業公開WEEK」など、授業公開をより効果的に実施する上での工夫を学ぶことができた。
- ・授業参観を通して、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた工夫や、「振り返りシート」の活用など、生徒が主体的に授業に取り組むための工夫について学んだ。

<自由の森学園中学校・高等学校（令和元年11月23日）>

- ・中学校・高等学校全クラスにおける授業参観を通して、対話・思考・表現を重視し、教室にいる全員で作る授業スタイルや、独自教材について具体的に知ることができた。
- ・定期テストに依らず、生徒による自己評価や教科担任が文章で記述するという独自の評価方法を知り、生徒を育てるための評価方法を学んだ。

- ・分科会での議論から、協働学習で学び合うためには、よい教材を選択することが不可欠との認識を強く持った。また、生徒が参加する形式の分科会を知ることができた。

(4) 検証の手立て

- ア 校内アンケート調査の実施（1、2年生）（令和2年1月実施）
学習面の悩み等を学級担任が把握し、改善する。
- イ 「高校生のための学びの基礎診断」の活用結果（1、2年生）（1年生：平成31年4月、令和元年7月、令和2年1月実施 / 2年生：平成30年4月、平成31年1月、令和元年7月、令和2年1月実施）
学習意欲と学習成績について分析し、改善を図る。

4 研究の成果、生徒の変容

(1) 学校全体で授業改善に取り組む体制を構築

昨年度は、学校全体での連携に課題を残したが、今年度は、教科内のみならず学校全体で授業改善に取り組む体制を構築した。具体的には、

- ア 本年度は、国語・数学・英語に加えて、地理歴史・公民・理科においても、近隣の中学校との連携を深めるなど研究を進め、公開授業へと繋げた。また、国語と英語の公開授業においては、同時展開している全ての授業を公開した。
- イ 教科の枠を越えた互見授業を複数回行った。特に「授業研究会」においては、全員が授業を参観すると共に、協議会で積極的に情報共有を行った。
- ウ 先進校視察の成果を、資料での報告という形だけに終わらせず、本校で取り入れるべきと判断した取組については、実施に伴う様々な労力を厭わず、積極的に実践した。

(2) 授業改善の目的を明確化

授業改善は、生徒や教員が日々抱えている困り感を解消するためのものでなければならず、進路指導・生徒指導・特別支援教育と一体であるべきとの観点から、本年度に実施したすべての校内研修を、授業改善の視点から企画し実施した。

- ア 授業時の生徒の行動観察を主眼とした「授業研究会」を実施し、参観で気づいた生徒の特徴を担当者で情報交換し授業改善に必要な視点を得た。
- イ アの観点から、すべての公開授業において「参観シート」を添付した指導案を作成するよう統一し、授業者から見た生徒像が掴みやすい形としている。
- ウ 授業時における生徒の行動を掴み、授業改善に繋げるため、以下の職員校内研修を行った。

- ・令和元年10月2日（特別支援教育研修として）

「高等学校における特別支援教育」講師 新潟県立教育センター 副参事 藤田 綾子

- ・令和2年1月17日（特別支援教育研修として）

「事例検討会」講師 県立吉田病院 医師 新田 初美

- ・令和2年2月14日（生徒指導研修として）

「生徒の問題行動の理解と対応」講師 新潟少年鑑別所 所長 内山 八重

(3) 生徒の変容

各教科で、定期的にアンケート（別添資料）を実施し、実態把握を行い、生徒がグループ活動の中で主体的に取り組むことができる授業展開を研究した。その結果、以下のことが分かった。

ア 授業中に生徒間で相談し、考えを深める時間が設定されていることで、学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えたり、仲間の発言で自分の考えを深めたりしている。

[根拠とした数値]

- ・「仲間と相談しながら考えを深める時間がある」の質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で87%、地歴公民で51%、数学で97%、英語で100%であった。
- ・「仲間の発言をよく聞いて、自分の考えを深めている」の質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で87%、地歴公民で92%、数学で97%、英語で95%であった。
- ・「学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる」の質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で74%、地歴公民で85%、数学で79%、英語で87%であった。

イ 授業が、教科の理解や考え方の気づきにつながり、授業を受ける上でのより良い姿勢に繋がっている。

[根拠とした数値]

- ・「この教科の力がついてきていると思う」の質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で94%、地歴公民で85%、数学で95%、英語で95%であった。
- ・「教科の知識や考え方が身につく内容だ」の質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で100%、地歴公民で85%、数学で100%、英語で100%であった。
- ・「集中して先生の話聞くようにしている」という質問に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」とした生徒は、国語で97%、地歴公民で100%、数学で100%、英語で100%となった。

また、「高校生のための学びの基礎診断」の結果からも、日々の授業に対する肯定的評価が見られる。授業理解姿勢を確認する項目を、以下の5つのレベルで評価している。

- 1 集中して理解することがまったくできない
- 2 集中して理解することがほとんどない
- 3 たまに集中して理解しようとしていることが多い
- 4 集中して理解しようとしていることが多い
- 5 いつも集中しようとしている

現1年生は、上記4と5に該当する生徒が、83.1%→81.9%→86.8%、と一旦やや下降したものの、上昇傾向にあり、普段の学習つまり授業に対する姿勢が好転している。※表中の単位は人

	1年4月					1年7月					1年1月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
現1年	0	0	27	89	44	2	2	25	67	64	0	1	20	87	51

しかし、現2年生については、4と5に該当する生徒が、93.1%→81.0%→80.4%→77.3%、と明らかな下降傾向にあり、いわゆる「中だるみ」の克服が課題となっている。※表中の単位は人

	1年4月					1年1月					2年7月					2年1月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
現2年	0	1	10	90	59	0	5	24	75	49	1	3	26	80	43	0	6	24	77	43

5 課題とその分析

(1) 本事業終了に伴う課題

本事業の終了により、学力向上推進委員会は解散となるが、この事業を通して培った学校全体で授業改善に取り組む機運を維持し、生徒の思考力、判断力、表現力の育成を図り、学習内容を定着させる必要がある。

(2) 各分掌・委員会の連携

生徒の進路希望及び生徒の問題行動の背景を把握し、授業改善につなげるため、進路指導部、生徒指導部、教育相談支援委員会などと連携を図る。生徒が学校生活の中で、小さな成功体験を蓄積し自尊感情を高め、基礎学力と自分に自信をつけさせる必要がある。

(3) 生徒の課題

- ア 上記「学習アンケート」の結果から、学習活動の中で、生徒は、自分の意見を仲間に伝えることにやや消極的であることが分かる。「授業開始までに教科書やノートを準備している」や「集中して先生の話聞くようにしている」といった質問と比較し、「学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる」の質問に「当てはまる」と回答した生徒が著しく低い。つまりきやすい箇所について共通理解を深め、基礎学力を定着させることで、自信を持って発言できる下地を作らなければならない。
- イ 「高校生のための学びの基礎診断」の「1日あたりの学習時間」や「普段の学習」に関する調査結果から、自宅での学習時間が回数を重ねるごとに少なくなり、また、家庭学習における集中度も回を重ねるごとに悪化している。現在、基本的な学習習慣を形成すべく、1学年を中心に、宿題の提出を課す取組を行っている。その際、宿題達成率を公開するなど、生徒の取組を積極的に褒めたり認めたりする工夫も行っている。

なお、「高校生のための学びの基礎診断」の結果は以下のとおり。普段の学習を確認する項目を、以下の5つのレベルで評価している。※表中の単位は人

1	ほとんど学習しない
2	学校で出された宿題は、できるだけやるようにしている
3	その日の気分によって、やったりやらなかったりする
4	毎日机に向かうが、集中できないことが多い
5	毎日ほぼ決まった時間に机に向かい、こつこつと学習している

	1年4月					1年7月					1年1月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
現1年	5	53	57	34	10	11	67	46	8	2	19	75	51	11	3

	1年4月					1年1月					2年7月					2年1月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
現2年	4	61	52	28	15	14	65	58	14	3	37	58	45	11	2	28	59	46	9	5

6 その他

「1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態」でふれた、「学校生活等に関する意識調査」について、令和元年2月実施の結果が出た。その内容を見ると、現在の自分の高校生活全体に「満足している」「どちらかと言えば満足している」と回答した生徒のうち、昨年度の調査では、1・2年生合わせて5.2%の生徒が「授業が分かりやすく学習が充実している」と回答していた。一方、今年度は、実に8.4%の生徒が同様の回答をした。学校生活が満足である理由に、「授業が分かりやすいから」と答える生徒が増えているという事実は、教師にとってこれ以上ない喜びである。この数値を励みとして、次年度以降も一層充実した学習活動を行う取組に努めたい。

また、同調査の「あなたの高校卒業後の進路希望の実現のために、現在の高校での学習内容は、直接役に立つと思うか」という質問に対し、昨年度は「役に立たない」「あまり役に立たない」と答えた生徒の割合が1年生で約30%、2年生では約35%であったことは既に述べたが、今年度の数値は、1年生で約16%、2年生では約14%と半減した。日々の授業を通して、社会や世界との関わり方、また、自分の興味・関心や適性に気づき、自らの将来の進路について深く考えている本校の生徒に頼もしさを感じるとともに、将来の活躍に一層期待する。

(別添資料)

令和元年度 学習状況アンケート結果 (全教科総合)

各項目単位 (%)		国語				地歴公民				数学				英語			
質問項目		古典B (3年3組)				現代社会 (1年2組)				数学I (1年1組)				英表I (1年3、4組)			
1 自分の学習活動について		4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
①	授業開始までに教科書やノートを準備している。	80.6	19.4	0.0	0.0	89.7	7.7	2.6	0.0	71.1	21.1	5.3	2.6	86.8	10.5	2.6	0.0
②	集中して先生の話聞くようにしている。	83.9	12.9	3.2	0.0	59.0	41.0	0.0	0.0	63.2	36.8	0.0	0.0	73.7	26.3	0.0	0.0
③	学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる。	19.4	54.8	22.6	3.2	41.0	43.6	15.4	0.0	26.3	52.6	21.1	0.0	50.0	36.8	10.5	2.6
④	仲間の発言をよく聞いて、自分の考えを深めている。	29.0	58.1	12.9	0.0	51.3	41.0	7.7	0.0	36.8	60.5	2.6	0.0	63.2	31.6	2.6	2.6
⑤	分からないことがあったら、仲間や先生に質問する。	25.8	58.1	16.1	0.0	30.8	46.2	20.5	2.6	44.7	39.5	13.2	2.6	57.9	31.6	2.6	7.9
⑥	この教科の力がついてきていると思う。	25.8	67.7	6.5	0.0	30.8	53.8	15.4	0.0	42.1	52.6	5.3	0.0	55.3	39.5	5.3	0.0
2 授業について		4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
①	課題や目標が示されるので学びやすい。	71.0	29.0	0.0	0.0	51.3	41.0	7.7	0.0	78.9	18.4	2.6	0.0	78.9	21.1	0.0	0.0
②	プリントなどの資料が工夫されている。	77.4	22.6	0.0	0.0	74.4	23.1	2.6	0.0	84.2	13.2	2.6	0.0	84.2	15.8	0.0	0.0
③	板書が見やすく、わかりやすい。	64.5	35.5	0.0	0.0	41.0	43.6	15.4	0.0	81.6	15.8	2.6	0.0	92.1	7.9	0.0	0.0
④	説明がわかりやすく、よく理解できる。	67.7	32.3	0.0	0.0	51.3	46.2	0.0	2.6	78.9	21.1	0.0	0.0	84.2	15.8	0.0	0.0
⑤	仲間と相談しながら考えを深める時間がある。	29.0	58.1	12.9	0.0	79.5	20.5	0.0	0.0	78.9	18.4	2.6	0.0	86.8	13.2	0.0	0.0
⑥	教科の知識や考え方が身につく内容だ。	58.1	41.9	0.0	0.0	53.8	41.0	5.1	0.0	76.3	23.7	0.0	0.0	81.6	18.4	0.0	0.0

【回答項目と数値】 4・・・ 3・・・少しあてはまる 2・・・あまりあてはまらない 1・・・あてはまらない
あてはまる